

説教余滴 2018年4月1日 復活祭の音楽、

『復活祭のための入祭文とキリエ』、サン・ピエール・ドゥ・ソレム修道院聖歌隊

標記は、私のレコードコレクションの中の一枚、これは、グレゴリオ聖歌でした。

盤に針を下ろすと馴染み深い針音が聞こえます。数秒が過ぎると、楽音ではない音が続きます。小鳥の鳴き声です。深い静寂の中に復活祭を告げる鐘の音が響きます。その余韻の中から、よく訓練された修道士たちの歌声が聞こえてきます。

ソレムの修道士たちはベネディクト会に属し、聖ベネディクトの会則を守り世俗から離れ、キリストに従って貞潔・従順・清貧の中で生きようと努めてきました。孤独と沈黙が生活の大部分を占め、彼らは共同体の中で暮らしています。彼らの一日は時課の典礼を中心に生まれ、残りの時間は個々に祈りながらそれぞれ自分の務めを果たしています。サン・ピエール・ドゥ・ソレム修道院は、1010年にベネディクト派のル・マン修道院の分院として設立された。この修道院は、ローマ・カトリックの典礼とその聖歌、「グレゴリオ聖歌」の促進に重要な役割を果たしていることで有名であり、数多くの著作やレコードがそこから生まれています。指揮者は、1952～1970年が、ジョセフ・ガジャール神父、その後はジャン・クレール神父が担当しています。私のLPは、1960年代に購入していますので、前者のものでしょう。

教会の伝統的な単声典礼聖歌を「グレゴリオ聖歌」と呼んでいるが、その起源はユダヤ教の詩編唱や賛美歌にまで遡るとされる。新約聖書にも、イエスが最後の晩餐の際に聖餐を行った後、「彼らは、さんびを歌った後、オリブ山へ出かけて行った。」（マタイによる福音書第26章30節）という記述があり、このような歌唱が、原始キリスト教の典礼における聖歌のもととなり、エジプトやシリアで発展したと考えられている。

サン・ピエール・ドゥ・ソレム修道僧達の朗唱は、声楽の教育を受けた歌手達とは異なり、地声で、歌うと言うより朗詠に近い。演奏と言うよりも典礼におけるグレゴリオ聖歌の実践を示すものと言って良いだろう。